

「現れた永遠の命」井上隆晶牧師

ヨハネの手紙一 1 章 1～4 節、ヨハネ福音書 1 章 1～3、14～18 節

①【ヨハネの手紙の背景】

この書は紀元 100 年前後に書かれたものであり、著者はヨハネの福音書を書いたのと同人物だと言われています。このヨハネという人物が、使徒ヨハネなのか、小アジア（今のトルコ）のエフェソ教会を指導していた長老ヨハネなのか、両方の説があります。イエス様の死後 60 年くらい経って書かれていますから、もし使徒ヨハネなら 80 歳後半でしょうし、長老ヨハネだとしてもイエス様をその目で見ただ人だということになるでしょう。

使徒たちの時代は、聖霊の力強い働きによって、不思議な業とするしに溢れた信仰の生き生きとした時代でした。しかし紀元 70 年にエルサレムがローマによって陥落すると、ユダヤ人たちは世界中に散って行きましたから、教会の中心地もエルサレムからアンテオキア、アレキサンドリア、小アジア、ギリシャ、ローマなどに移っていきました。イエス様を目撃し、奇跡を体験した最初の世代の信者たちが世を去ると、イエス様を見たことがない信者たちの世代になります。すると偽の教師たちが異なった教え、異なった福音を教会に持ち込んで来るようになりました。その中で特にキリスト教に影響を与えたのが「キリスト教グノーシス派」と呼ばれるグループでした。グノーシスとは知識という意味です。彼らは罪を犯すような弱い肉体を創造した旧約の神は低次元の神であり、靈魂を救う新約の神キリストは高い次元の神であるとして旧約と新約の神を分けてしまいます。肉体を汚れたものとして軽視し、肉体によって罪を犯すことに罪責感を感じてはならない、靈的知識こそが大切だと教えます。靈肉二元論です。彼らが教えるキリストとは、神は汚れた肉体など受け取らないから、現れたキリストは幻であると教えました。これを「仮現論（Docetism）」と言います。受肉を否定するのです。ユダヤ教も神の受肉を否定します。また、神が苦しみを受けることは考えられないとして、神キリストの靈は、人間イエスの洗礼の時から十字架の直前まで宿り、十字架の前に靈は去って、十字架で苦しんだのは単なる人間イエスであると教えます。これを「養子論」と言います。イスラム教が教えるキリストに良く似ています。神が苦しみ、死を体験したことを否定するのです。こうやって使徒たちから伝えられた教え、福音を歪め、間違ったイエス様を伝えようとしたのです。

②【歴史の中に本当に現れた神の子イエス・キリスト】

このような背景があつてこの手紙が書かれたのを知ると、冒頭の文章の意味が良く分かります。1～4 節までは手紙の形ではなく、各教会に回覧される説教・勧告として書かれています。1 節にまず「初めからあつたもの」と書き始められます。この初めはヨハネ福音書の冒頭の「初めに言があつた。言は神と共にあ

った。言は神であった。」と非常に良く似ています。キリストは万物が創造される前からおられた神という意味です。「わたしたちが聞いたもの、目で見たもの、よく見て、手で触れたものを伝えます。すなわち、命の言について。」これは仮現論に騙されないように書いたものです。キリストは幻なんかではない。私はこの目で本当にこの方を見たし、この手で触れたのだ、と言っているのです。2節に「この命は現れました。御父と共にあったが、わたしたちに現れたこの永遠の命を、わたしたちは見て、あなたがたに証しし、伝えるのです。」とあります。フランシスコ会訳は「わたしたちは永遠のいのちを見ました。」と訳しています。ただの人を見たのではありません。永遠の命が、すなわち永遠にいます神が肉体を取った人として現れたのを見たということです。神が本当に人になった、これが、教会が伝えてきた福音なのです。神が本当に十字架にかかって苦しみ、死を体験し、復活した。これがキリスト教です。これを告白するのでキリスト教はユダヤ教から別れたのです。単なる人間イエスならユダヤ教やイスラム教になるのです。

●以前、神戸改革派神学校の校長である吉田隆牧師が「聖書では距離が近い状態を幸せと呼んでいます」と言われました。保育園に行くと、みんな集まってきて、われ先に私の膝の中に入ろうとし、足にしがみつき、ひつつこうとします。園児たちが一つの輪になって座する方法が分かりますか？保育士の先生は「は～い、肩と肩をくっつける!」と言うんですよ。すると園児たちはちょこんと座って隣の子とくっつきます。「はい、そこ離れてる!」と言われるともっとひつつきます。

私たちはスキンシップを喜びます。一緒に食事をするとなじみます。手を握られると温もりが伝わり、安心します。イエス様は言葉だけでも癒せたのに、病人に手を触れて癒されました。病気の人は嬉しかったと思います。子供たちはイエス様の手に抱かれましたし、弟子たちもイエス様の懷によりかかり、抱きつきました。神はイエス様の肉体を通して人間に触れ、人間と交わり、スキンシップを取られたのです。神が人と交わるためには言葉だけでなく、むしろ肉体が必要なのです。神は今も、司祭を通して信者の手を握り、油を塗って癒し、十字架で祝福し、聖餐のパンとぶどう酒で人の中に深く入り、その人と一体になって蘇らせまします。キリストが完全な人間だからこそ、真似ることが出来ますし、同時に完全な神だからこそ、私の罪と死を癒すことができるのです。単なる人間だけでは救いはありません。それでは道徳になります。私たちが救われるためには、単なる人間に触れられるのではなく、神に触れられる必要があるのです。現代でも異なるキリストのイメージが入ってきています。ある牧師試験志願者は「聖書には三位一体という言葉は出てこないの、三位一体は信じない。」と言ってるのを聞きました。大変な時代だと思います。

③【教会（キリスト）との交わりを願う】

「あなたがたに伝えるのは、あなたがたもわたしたちとの交わりを持つようにな

るためです。わたしたちとの交わりは、御父と御子イエス・キリストとの交わりです。」(1:3) この場合の「わたしたち」というのは教会のことです。教会と交わりを持って欲しいというのです。教会と交わることは、同時に父なる神と御子イエス・キリストと交わることになるのです。教会と交わらないことは、御父と御子イエスとのも交われないことになるのです。人間は神と直接交わることは出来なくて、キリストと教会を通して神と交わるのです。信仰生活というのは、一人では出来ません。教会が必要です。一人で聖書を読んでも意味が分からず変な解釈をすれば異端になります。聖餐も洗礼も行えません。教会の聖なる伝統の中にキリストの命があるのです。異端者たち、つまりグノーシス的キリスト教を伝える偽教師たちは、エフェソ教会から去って行きました。「今や多くの反キリストが現れています。…彼らは私たちから去って行きましたが、もともと仲間ではなかったのです。仲間なら、私たちのもとにとどまっていたでしょう。」(Iヨハネ2:18~19)と書かれています。彼らは伝統的な教会を否定し、自分たちこそが本物のキリスト教徒だと主張し、自分たちこそ本当の神を知っていると主張しますが、キリストの教えを守ろうとしませんでした。「神を知っていると言いながら、神の掟を守らない者は、偽り者で、その人の内には真理はありません。」(Iヨハネ2:4)

●2世紀にキプリアヌスは「教会一致論」という書を残しており、そこにこう書いています。「キリストの教会から離れる者は、キリストの報いも受けることは出来ない。…教会を母としてもたない者は、神を父として持つことができない。」また同じ2世紀のエイレナイオスもこう書いています。「教会の中にはキリストの交わりが、すなわち不死性、確かな信仰、神へ至るはしごである聖霊がある。神は…聖霊のあらゆる働きを教会に置いたと聖書は言っている。教会に集まらない人々は、これに与ることはできず、命に与らない。教会のある所には神の霊がおられ、神の霊がおられる所には教会とすべての恵みがあるからである。」「使徒たちは誰でも意志さえあれば教会から命の飲み物を受けることが出来るように、まるで倉に集めるかのように、真理に関することをすべて教会に集められた。この教会こそが命への入り口であって、他のものはすべて盗人であり強盗である。」

私たちは普段、当たり前のように教会に通っていますが、この教会という神が造られた神秘的な唯一の群れは、キリストの像であって、彼の持っているあらゆる祝福の宝庫であって、それを私たちに分け与えてくれる場なのです。教会は私たちに神を出会わせ、神に私たちを慣れさせるために、この世に現れた天的な場所なのです。どうかこの教会との交わりを大切にしていきたいと願います。